

保育内容（人間関係）の教育方法の一考察

—つながり地図から見えるもの—

A study on educational method of child care and education (Human relationships)

—What can be seen from the connection map—

毛利 泰 剛

Yasutaka Mohri

1 はじめに

本稿では、幼稚園教諭・保育士の免許資格のために必修とされている、保育内容（人間関係）の講義で行った実践について考察する。

保育内容（人間関係）は保育内容5領域の一つであり、「人間関係」は名前の通り、人と人との関わりに関する領域である。平成29年告示の幼稚園教育要領（2017）によれば「人間関係」のねらいは、①幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう、②身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ、③社会生活における望ましい習慣や態度を身につけるである。これらのねらいが設定されているように「人間関係」は保育者や友達、地域の人々など多様な人々と関わる経験を通して、人と関わる力を養うとともに、子どもの自立を導くことが含まれている。これらの能力を考え、導いていく観点として、「非認知的能力」を育てるという観点への認識が注目されている。

「非認知的能力」について、無藤（2016）はIQなどの数値で示される認知能力とは異なり、「学びに向かう力や姿勢」のような「目標や意欲、興味・関心を持ち、粘り強く、仲間と強調して取り組む力や姿勢」を中心としたスキルであると述べている。近年、国際的にも「非認知的能力」を育む保育の観点の必要性の様々

な研究成果が見られ、保育内容（人間関係）において「非認知的能力」の育みという観点から様々な研究や考察が進んできている。

保育者養成の観点から「非認知的能力」について考えたとき、筆者は学生に対して自己理解を深める必要があると考えている。その理由として、「非認知的能力」を育むためには、保育者自身の人との関わる姿が、幼児にとってモデルになるという点が挙げられる。伊藤（2017）は保育で「非認知的能力」を育むには情動の厚さや温かさをもった保育者によって豊かな感情の経験ができる環境を整えることであると述べている。つまり保育者養成課程では学生に情動の厚さや温かさを持たせる指導を行うことが必要である。これらの指導は様々な養成カリキュラムの中で培われるものであるが、保育内容（人間関係）はその指導において中心的なカリキュラムを担うと考えられる。実際、田中・岩治（2017）は保育者養成課程における広義のシラバスを分析する中で、多くの大学・短期大学では、自己の確立と他者の共感的理解・コミュニケーションの大切さを学び、「人と関わる力を養う」という保育者の役割を認識することを目的としていることを明らかにしている。

一方で現在の学生の傾向として、自己の確立に悩んでいたり、コミュニケーション能力が不足していたりという傾向があると言われている。実際、ほとんどの大学ではそれらを補うために、キャリア教育を中心と

して自己の確立や自己分析、コミュニケーション能力の向上といった目的の科目や講座を開講している。また、大学生に限らないが、若者の進路意識に対して、「やりたいことがわからない」という不安、あるいは、やりたいことがあっても「それが実現できるかどうかわからない」不安を助長した一面がある（本田,2009）ことが指摘されたりもしている。保育者養成課程に所属する学生は保育者を目指すという点で、一般的な大学生よりは職業意識や進路意識が高いと考えられるが、やはり自己の確立や自己分析といった面の指導は必要であり、「非認知的能力」を育む保育という点を考えたうえでも、「人と関わる力」の基礎としての自己理解を深めることは大切な指導領域であると筆者は考えている。

自己の確立や自己理解、コミュニケーションの促進は心理学からのアプローチが盛んに行われている分野である。筆者の専門は臨床心理学であるが、心理学だけでなく臨床心理学の視点からもキャリア教育をはじめとしたキャリア発達支援の検討が少しずつ広まっている。筆者はスクールカウンセリングや子どもの発達・教育相談の経験をもとに、臨床心理学的な支援を大学生の教育にも応用したいと考えており、実際に学校等において臨床心理学的支援に使用している「つながり地図」を保育内容（人間関係）の講義に導入することを試みた。「つながり地図」を用いることで、学生の自己理解を促進し、幼児の人間関係の理解と「人と関わる力」の理解につなげることを目的としている。

保育内容（人間関係）について、本学では3人の教員によるオムニバス形式の講義を行っており、筆者はその中でも人間関係と遊びに関わる分野を中心に講義を行っている。遊びの中では様々な人間関係やそれぞれの子どもの情動の制御や調整が行われているが、感情は目に見えないため、複雑な人間関係のつながりを見落とすことも多い。そこで、筆者の担当の講義では、自己の人間関係のしくみを理解することから始めることにした。その手段として用いたのが「つながり地図」である。「つながり地図」を作成して、まずは学生に自分の現在の人間関係について考える時間を設定した。自分の人間関係を視覚化し、それぞれの立場での関係性を振り返ってもらった。その後、幼児（5歳時の）人間関係を思い出しながら、その時の人

間関係について同じように「つながり地図」を作成して、人間関係を視覚化した。二つのつながり地図を学生自身に比較検討してもらい、様々な人間関係の気づきや関係性を想定してもらった上で講義に入っていく形とした。講義内容としては、主に「人と関わる力」、「気になる子どもへの対応」、「子どもと保育者の信頼関係の構築」、「協同性づくり」、「道徳性の芽生え」といった内容について遊び場面とのつながりを提示しながら、そこでの人間関係の様子を含めた理解や検討を行った。また最後に事例検討という形で講義を行い、学生同士でのグループディスカッションを行った。

本稿では、このような講義の流れの中、今回の講義に用いた「つながり地図」がどのように学生の思考に活用され、「人間関係」の理解につなげていくのかという講義実践の一例を考察する。

2 つながり地図について

現代社会は対人関係が希薄化し、人付き合いが難しくなってきたといわれている。吉森（1991）はその要因として①家族・家庭の変容、②地域社会の変容と過疎・過密、③機能社会化と組織の巨大化、④機械化と省力化、⑤情報の増大と活動範囲の拡大、⑥競争の激化、⑦人間関係のルールの変容、の7つを挙げている。将来、保育者として子どもたちに関わる学生にとって特に①家族・家庭の変容と②地域社会の変容と過疎・過密は大きく関係してくる問題だといえる。

①家族・家庭の変容では、核家族化により人間相互の接触の絶対量が減少し、子どもたちの人間関係のスキルが未熟であるという問題が考えられる。幼稚園や保育所における保育では、家庭との関わりは必須の職務である。核家族化により、兄弟関係や近所の付き合いが余りなく、園の人間関係がうまくいかない子が出てくると予想できる。

②地域社会の変容と過疎・過密については、従来の地域共同体が解体化され家庭が孤立していることが考えられる。勤務する園の地域性によっても大きく違う所であるが、地域一体で子どもたちを支えていこうという地域は減っていると考えられる。一方で、家庭だけでなく幼稚園や保育所の方も、近年は住民による騒音等からの保育所の設置への反対問題等も起こってい

る。幼稚園や保育所が子どもの教育や保育について地域の人々全てに理解していただける環境とは限らない可能性もある。

そういった現代社会の状況の中で、保育者養成科目である保育内容（人間関係）では、家庭のつながりや地域社会のつながりといった様々な人間関係について理解していくことが必要であると言える。しかし、人間関係は多種多様で複雑であるため、教科書的な知識だけでは情動の関係性まで理解することは難しい。そのため、その状況に応じた人間関係の理解と対応や子どもへの育みが保育者には求められることになる。

状況に応じた人間関係や他者を理解する上で重要なスキルの一つが自己理解である。自己理解が進んでいなければ、他者の視点に立って考えることは難しい。そこで筆者の担当の講義では学生に人間関係を自分のこととしてとらえ、自己理解について深めながら、幼児の人間関係を考えていくきっかけを持ってもらいたいと考えている。

人間関係についての自己理解の方法について、自分の対人関係を図形や地図を使って表現する方法がある。地図にすることで、人間関係を視覚化し、客観的

に人間関係の全体像を眺めて考察することができる。対人関係を図形や地図を使って表現する方法を、丹治（1993）は「対人地図」と呼び、相手との心理的距離やイメージを考え直す方法として提案している。また大竹（2005）は小学生や中学生向けに「つながり地図」を作成している。「つながり地図」は自己理解や自己表現の一手段として、学校の相談室や保健室等で教員やスクールカウンセラーによって活用されているものである。本講義ではそれらを参考に、大学生の講義向けとしての「つながり地図」を作成した。図1は「つながり地図」のイメージ例である。今回の大学生向けとしての特徴はB4用紙を利用し、大竹（2005）の「つながり地図」より書き込める空間を広くしている。真ん中の顔の絵を自分自身として、そこから線を引いてつながりのある人間関係を自由に描いていくものである。記入時間は15分とし、思いつく関係を思いついた順に思いつく限り記入してもらった。

3 学生の感想から

筆者が担当する保育内容（人間関係）の講義の初回

保育内容(人間関係)つながり地図

学籍番号() 名前()

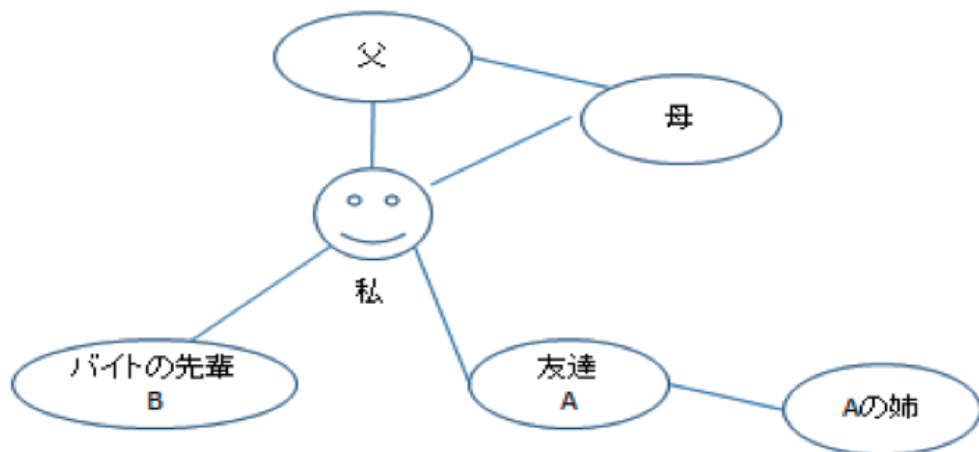


図1 つながり地図の例

に「つながり地図」を作成した。学生には今の人間関係について作成し、その後5歳時の人間関係を作成し、それぞれを比較してもらった。「つながり地図」の記入前である講義開始時点で、幼児の具体的な人間関係を学生に挙げさせると、ほとんど家族か先生と言う発言であった。しかし、自分の人間関係を視覚化し、現在と5歳時の「つながり地図」を作成、比較することによって、友達関係についての発言が見られるようになった。具体的には園の友達、近所のお兄さんお姉さんや親戚など、学生それぞれの人間関係に基づく、幅広い人間関係についての発言がみられるようになった。

「つながり地図」を作成しての学生の気づきを明確化するために、5歳時の人間関係と現在の人間関係の「つながり地図」についてそれぞれ感じたことを一つずつ書いて振りかえってもらった。ここではその感想を集計した (n=111)。ただし、現在の人間関係の気づきについては、二つの「つながり地図」を比較した感想を書いている学生もいたため、その感想を「その他の感想」とした。また、無記名の感想や複数記入してあった感想は除いた。

表1 5歳時の人間関係の気づき

幅が狭い、近所の人が多い	32
家族や兄弟,祖父母が多い	20
関りが深い	15
同じ園、同世代の子が多い	8
人以外が多い(動物など)	7
幼稚園(保育園)の先生がいる	6
自分から出ている線が少ない	5
習い事関係の人がいる	4
あだ名が多い	3
今連絡を取っていない人が多い	3
思い出の場所が出てくる	3
外遊びの関係が多い	2
男女差がない	2
親しい友達がいない	1

・5歳時の人間関係について(表1)

1番多く挙げられた感想として、「人間関係の、幅が狭い、近所の付き合いが多い」が述べられた。また、2番目に「家族や兄弟、祖父母との関係が多い」が述べられた。これらのことから幼児期は行動範囲が狭く、家族を中心とした人間関係が多いことがわかる。この結果は当たり前の様なことであるかもしれないが、現在の人間関係と比較していることから、3番目に「関わりが深い」という感想も多くなっていた。このことから幼児期の人間関係は、今の学生の人間関係よりも範囲は広がらないが、深い人間関係を形成していたという実感があることがわかる。実際に記憶の範囲内という制限はあるが、印象的な幼児期のエピソードを今でも覚えている学生は多い。また「同じ園、同性代の子が多い」、「幼稚園(保育園)の先生がいる」と言う感想からも、幼児が所属する幼稚園(保育園)の人間関係は、家族関係につぐ深い人間関係を構築していたことがわかる。これらのことから幼稚園や保育所は、幼児の人間関係にとって重要な位置づけになることが実感できた。

表2 現在の人間関係の気づき

友達の量が多い	26
人間関係の幅が広がっている	24
浅いつながりが多い	7
家族のつながりが多い	6
友達の友達がいる	6
上下関係がある	3
関わる場所が多い	2

・現在の人間関係について(表2)

現在の人間関係の感想について、一番多く挙げられたのは「友達の量が多い」という点である。幼児期は主に家族や近所、幼稚園(保育園)での人間関係であったが、大学生である現在は「人間関係の幅が広がっている」という特徴があり、幼稚園から小学校、中学校、高校、大学までの人間関係をはじめとして、習い事、バイト先、部部活・サークル、趣味仲間、恋人など、その人その人それぞれに多種多様な人間関係が広がっ

た。

幅広い関係が広がる一方で、それぞれについては「浅いつながりが多い」という感想もあり、例えば家族であっても、進学のための一人暮らし等によって関わりが少なくなっている等の意見が出た。また「友達の友達がいる」と言う視点やバイト先などの「上下関係がある」と言う感想も見られた。

表3 その他の感想

今でも関係がある	14
今では関係が全くない	14
名前などを覚えていない	5
その他の記述	4

・その他（表3）

その他の感想として、幼児期に関係していた人間関係が「今でも関係がある」と述べた学生と「全く関係がない」と述べた学生がほぼ半数となって意見が分かれた。家族関係でなく幼児期の人間関係が今でも続いている学生もいれば、引越等、物理的な関係で全く関係がなくなってしまうという意見の学生も見られた。特に幼児期の人間関係は携帯やメールと言った当人同士の直接的なやりとりが可能な連絡手段を持っていないことから、当時は親密だったとしても連絡先が分からず、全く連絡が取れない状態であるという意見も出た。

その他には、約15年前のことであるため、顔は覚えていないけど「名前を覚えていない」など、記憶があまり残っていないという感想も見られた。

人間関係について考察するとき、自己を中心として相手との関係をとらえることを「対人関係」という言い方ができる。対人関係の成立は相手の存在に気付くことから始まり、レヴィンガーらは対人関係のレベルを大きく三段階に分けている（吉森,1991）。その三段階とは、①気づきの段階、②表面的接触の段階、③相互関係の段階である。5歳児に多くみられる対人関係は③相互関係の段階であり、基本的に1対1のコミュニケーションとなる。そのため、自分と相手がお互い

の影響を大きく受ける関係性であり、相互関係の相手としては、家族をはじめとする子どもの成長に大きく影響与える存在となる。「つながり地図」を見る限り、保育者も幼児とこの関係に発展する可能性が高く、子どもの成長に大きく影響を与える存在となりうる。そのため、子どもとの関係性を発展させるための資質が必要であり、また子どもの情動に大きな影響を耐える存在となることによって、「非認知的能力」の育みが可能になると考えられる。

現在の対人関係では②表面的接触の段階が多く、ある程度のコミュニケーションはあるものの社会的役割に基づく表面的な関係が多い。そのため、部活の先輩後輩、バイト先の上司部下といった、情動に大きく影響を与える関係ではない場合が多いという特徴がある。大人になると対人関係が希薄化するという捉え方をすると否定的な見方に感じるが、社会的役割を果たすことも人間関係では大切なことであり、表面的な接触による人間関係が増えることは、人間関係の成長ととらえることもできる。いずれにしても、これらは「つながり地図」から見える幼児と大学生の人間関係の質の違いである。人間関係の質は言葉やテキストでの説明では学生にとって実感することが難しい部分であるが、自分の人間関係を視覚化して実感したため、学生が自分の記憶から、それぞれの人間関係の特徴を捉えることができた講義となった。

4 保育内容（人間関係）の講義実践：「遊び」とのつながり

今回の講義では、遊びと人のつながりから子どもの世界を学び、保育者としての資質や感覚を学ぶことを一つの目的として行った。最初に自分の人間関係を「つながり地図」で把握してもらい、自分の遊びと幼児の遊びの人間関係について検討してもらうきっかけとした。

講義前の問いかけで幼児の遊びの人間関係を聞くと友達同士を想定して答える学生が多かったが、「つながり地図」で人間関係を比較することによって、幼児にとっては遊びの人間関係においても、より家族や先生といった大人との関係が影響していることを学生が実感することになった。そのため、遊びの中での保育

者と子どもとの関係、子ども同士の遊びの関係の中に保育者がどう支えるかという視点で、遊びについての講義内容をとらえるようになった。筆者もその視点に対する問題提示を毎回の講義で作成し、ただ内容を説明するのではなく、学生それぞれの視点を講義の中で取り上げるようにした。そのような講義を行うことによって幼稚園や保育園の場面はもちろんこと、より自分の具体的な遊びの場面の記憶を検討し、その時の人間関係がどのような関係性であったかを考察する発言も見られた。

講義内では事例検討も行ったが、事例検討において「つながり地図」作成の効果が大きく見られたといえる。事例検討では遊びに関する課題事例を与え、5名ほどのグループで検討会を行う形とした。事例検討では基本的に文章による記録を読むことで検討するが、文章に書かれていること以外の情報は想像で検討することになる。学生の中にはノートにその事例場面の「つながり地図」を作成し、事例検討する者がいた。一度「つながり地図」の作成を経験しているため、事例の内容についても「つながり地図」を作成することで複雑な人間関係を整理する考え方をしていた。

講義ではいくつかの事例を取り上げ人間関係の考察を行ったが、本稿ではその中の一つを取り上げたい。事例は守(2012)の「遊びと人のつながり」の事例を引用した。「タイセイ！一緒にコマの色塗ろう！」という5歳児の事例である。

事例

冬休みにひもゴマを家に持ち帰り、3学期から本格的にコマ回しに取り組んだ。(略)

タイセイくんはコマ回しにはあまり乗り気でなかった。挑戦してもなかなかうまくいかずに諦めてしまうことが多かった。保育者が手を取り、一緒にしても回せたり回せなかったり…。そのモヤモヤを乗り越えなくてはできないのがコマ回しだ。タイセイくんは、「もういい。どうせやったってうまくいかない」と嘆いていた。(略)

この学年は自分で回せるようになるとコマに色塗りができるようにしている。タイセイくんと仲の良いノゾムくんは、冬休み中の練習の成果もあって、園でも回せるようになった。でもなぜか、ノゾムくんは色塗

りをしようとしな。保育者が「なぜ？」と思っている矢先、ノゾムくんのお母さんが、「ノゾムは、タイセイくんができるようになるのを待っているようです」と連絡帳で知らせてきてくれた。保育者は、敢えてノゾムくんの気持ちをタイセイくんには伝えなかった。(以下、略)

(守巧(2012).遊びと人のつながり 酒井幸子(編)保育内容人間関係-あなたならどうしますか?- 萌文書林から抜粋)

ここに挙げた文章は事例の一部であるし、またこの事例自体もテキスト用に作られている。そのため、登場人物は少なく、比較的イメージがしやすい事例であるといえる。保育者のコマ回しに挑戦してほしい思いや「敢えてノゾムくんの気持ちをタイセイくんには伝えなかった」意図も保育を志す学生であれば読み取ることが十分に可能なレベルであるといえる。その読み取りも大事なことであるが、この講義においては様々な立場の思いが交差している点に注目させたいという筆者の意図があった。そのため、講義者からはその読み取りの説明や事例の解説等は行わず、事例から何を感じて、考えることができるかをそれぞれのグループ内で自由に意見を言い合ってもらった。

この事例では保育者の立場としてコマ回しのできないタイセイくんにどんな援助をあたえるか、ノゾムくんの気持ちをどう受け止めるか、今後タイセイくんやノゾムくんはどう関わっていくかなど、保育者としてどのような対応をするべきかを検討することによって、保育者としてどうあるべきかという事例からの学びにつながると考えられる。当然、人と人との関わりの問題であり、状況によっても対応は変わるので、絶対的な正解はないといえる。しかし、いずれにしても保育者の対応を考えていくためには、タイセイくんやノゾムくんの気持ちを考えていかなければ、具体的な対応方法は見当がつかないものである。そのため、いかに多様な視点からの意見が出るかが、事例を深めていく上で必要なことであると考えている。

では、学生はこの事例検討においてどのような考察を深めたのだろうか。講義では、この事例検討で検討したことをグループ発表及び個人レポートとして提出してもらった。発表においては発表時間の長さもあり、

保育者の立場としてどうあるべきかという発表が多くを占めた。しかし、レポートの提出を求めると、特にグループでの討論中に「つながり地図」を作成していたグループはその様子を視覚化して共有したためなのか、保育者以外の視点からの対人関係も細かく考えて意見を交換していた。具体的には、タイセイくんはコマ回しができないことをどう感じたのか、ノゾムくんはどんな気持ちでタイセイくんをみているのかという視点から、ノゾムくんのお母さんはなぜ保育者に知らせようと思ったのか、それを受けたいうで、なぜ保育者はノゾムくんの気持ちをタイセイくんに伝えなかったのか、その対応によってノゾムくん、またノゾムくんのお母さんがその対応を知った時どう思うかなど、「つながり地図」に描かれたそれぞれの立場からの気持ちを想像し、地図に直接それぞれの立場になって感じたことを書き込むことによって様々な視点からこの人間関係を検討しようとしていたのである。

秋田ら（2015）は「非認知的能力」を育む保育実践を深めるためには、保育者自身の「非認知的能力」を育むことや子どもが遊びに没頭できる十分な時間を確保すること、保育者間で保育観を共有できるような環境の中で保育をすることなどが必要であると述べている。保育の実践を深める講義として、今回は「つながり地図」が複雑な人間関係やどの立場に寄り添った考えなのかをまとめ、グループで共有するための一つの手段として用いることの役目を果たしたと考えられる。保育観の共有という点では、レポートにおいても「つながり地図」が作成されていることで学生と講義者との共有につながった。レポート自体は文章化して作成しているが、つながり地図が添付しているレポートでは、それぞれの立場が視覚化されており、筆者が読んでいても学生がどの立場で何を考えているのかを共有しできるものになっていた。

5 まとめ

本稿では「つながり地図」を使った保育内容（人間関係）の講義で行った実践例について検討した。「つながり地図」を作成することによって自分自身の人間関係を視覚化し、自分の現在の人間関係と幼児期の人間関係を比較、再確認することによって、事例検討な

どを幼児の立場に立ってあたかも自分のことのように具体的にとらえていく過程について考察した。

今日の学生は希薄化しているといわれている現代社会の中で、子どもたちの立場に立った人間関係について学び実践していくことは、自己理解や実体験の少なさから具体性の乏しいものになっていく可能性がある。その中でいかに学生に抽象的な人間関係に具体性を持たせて考えさせ、保育内容（人間関係）の学びにつなげていくのかを検討しなければならない。数値で示されない「非認知的能力」を育む保育者を育てるためには、知識の供給だけでなく保育者の「非認知的能力」を育てる講義実践が必要であるだろう。講義において保育者の人間関係の自己理解を進めることは、「非認知的能力」を高めることにつながっている。今回は「つながり地図」を使用した講義の流れについて考察したが、さまざまな手法を検討していくことで、より良い教育方法が見いだせると言える。数値ではない「非認知的能力」だからこそ、検証方法も今後検討していく必要があるだろう。

本稿の考察の課題として、「つながり地図」を用いた講義の実践における知見は分析したもの、講義者としての主観的な評価による分析となっている。また、「つながり地図」自体の構成や詳細な分析までは行っていない。そして、講義の一方法としての考察であり、学生の講義内容の習得度などとの関連性は見出していない。今後は「つながり地図」作成を講義の中で継続していくなかで、地図の内容の分析や調査を行い、講義の効果の測定、また現在の学生の人間関係についても検討していくことで、より保育内容（人間関係）の講義実践に役立つデータを見出せるのではないかと考えている。

引用文献

- 秋田喜代美・中山昌樹・太田亜希（2015）：今、OECDなど世界が注目している「社会情動スキル」とは？ これからの幼児教育 2015 夏号 ベネッセ教育総合研究所 2-9.
- 本田由紀（2009）：教育の職業的意義. ちくま新書.
- 伊藤理絵（2017）：「保育内容 人間関係」再考：非認知的能力を育む保育の観点から 名古屋女子大学紀要. 家政・自然編, 人文・社会編 285-297.
- 文部科学省：幼稚園教育要領〈平成 29 年告示〉（2017） フレーベル館

- 守巧 (2012) : .遊びと人のつながり 酒井幸子 (編) 保育
内容人間関係 - あなたならどうしますか? - 萌文書林
pp.162-177.
- 無藤隆 (2016) : 生涯の学びを支える「非認知的能力」をど
う育てるか これからの幼児教育 2016 春号 ベネッセ
教育総合研究所 18-21.
- 大竹直子 (2005) : 自己表現ワークシート 図書文化社 .
- 田中卓也・岩治まどか (2017) : 保育者養成における講義の
シラバス分析とその課題に関する考察 - 保育内容 (人
間関係)を中心に - 共栄大学教育学部研究紀要 第
1号 49-59.
- 丹治光浩 (1993) : 対人地図 - 対人関係理論 - 川瀬正裕・
松本真理子 (編) 自分さがしの心理学 - 自己理解ワー
クブック - ナカニシヤ出版 pp.48-53.
- 吉森讓 (1991) : 人間関係のハンディブック 北大路書房 .